

ヒブ(インフルエンザ菌b型) 予防接種について

1. ヒブ感染症とは

- ・インフルエンザ菌b型(ヒブ)という菌が鼻やのどから入って、起こる病気です。
- ・ヒブワクチン導入前の日本では、年間約600人が重いヒブ感染症である細菌性髄膜炎になっていました。細菌性髄膜炎は毎年約1,000人がかかっていましたが、60%がヒブによるものでした。
- ・細菌性髄膜炎にかかった子どもの約66%は0~1歳児で、約34%が2~4歳児です。生後5か月頃から急に増えます。
- ・集団保育の子どもは2~3倍かかりやすいです。



2. 症状・経過は?

- ・脳を包む髄膜、のどの奥の喉頭蓋、肺などに炎症を起こします。
- ・細菌性髄膜炎になっても早期の症状は熱と不機嫌くらいで、血液検査をしても多くは風邪と区別が付きません。
- ・その後、ぐったりする、けいれん、意識がないなどがでてきます。
- ・抗菌薬(抗生物質)が効かない耐性菌も多く、治療が大変で予防が一番です。
- ・喉頭蓋炎になるとたいへん重症になり、息ができなくなって死亡することも少なくありません。

3. 合併症は?

- ・髄膜炎にともなう合併症は多くあり、死亡や発達・知能・運動障害などの他、難聴(聴力障害)などが起こることがあります。
- ・死亡する率が3~7%、脳の後遺症の発生率が15~20%と大変重大な病気です。

4. ワクチンの効果と副作用(副反応)は?

- ・ヒブワクチン(不活化ワクチン)がたいへん有効です。
- ・WHO(世界保健機関)は、ヒブワクチンを最重要ワクチンの一つに位置付けています。
- ・接種したところが赤く腫れたり、しこりになったりする場合があります。頻度は少し多いですが、腫れがそれほどひどくなることはありません。

5. 予防接種の受け方と時期は?

- ・接種対象は、2か月以上5歳未満です。

- ・病気が重だけでなく早期診断が難しいので、生後2か月になったらできるだけ早く接種を開始し、6か月までに初回免疫の3回の接種を終えるようにしましょう。
- ・27日～56日までの間隔で3回、3回目接種後7～13か月の間に4回目(追加)を受けます。
- ・**生後7か月までに標準的スケジュールで始められない場合は、接種回数などが変更になりますので、子育て支援課にご相談ください。**

6. 予防接種による健康被害救済制度について

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく補償を受けることができます。健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額が支給されます。死亡一時金、葬祭料以外については、治療が終了する又は障害が治癒する期間まで支給されます。

ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因（予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等）によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に補償を受けることができます。

※ 給付申請の必要が生じた場合には、子育て支援課へご相談ください。

7. その他

※ 接種後30分間は特に体調の変化がおこりやすいのでご注意ください、接種機関もしくは医師と連絡ができるようにしてください。

子どもの細菌性髄膜炎の6割はヒブが原因と言われています。



小児用肺炎球菌ワクチンと合わせて接種することで、細菌性髄膜炎の8～9割が予防できる、とされています。

予防接種に関するお問い合わせ：京丹後市子育て支援課 Tel.0772-69-0370